

---

# EVER LASTING

朔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

EVER LASTING

### 【Nコード】

N8815A

### 【作者名】

朔

### 【あらすじ】

最初は夢からはじまった。これはただの夢だと思っていた。ただの夢だと。けれど、それはすべてのはじまりだった。

## プロローグ

夢を見た。いや、夢じゃない。それは、かなり昔の現実。

「……姫様、もうあの御方のことはお忘れ下さい。」

「……いや！必ず、必ずお戻りになるとおっしゃったもの！  
私はあの御方が帰られるまで婚姻式なんて挙げないわ！」

「……何を言うのです。姫様の嫁ぎ先は既にお決まりになっ  
ておられます。本日は皆様の前でお披露目する日なのですよ。」

「……それは勝手に父上が決まられたことだわ。私は…あの  
御方としか結婚しません。」

「……いつ、戻られるか分からないのですよ。お戻りにな  
るかさえ…。」

「……戻ってくるわ！約束を違える方ではないわ。」

「……姫様、いつお戻りになるか分からない御方など忘れて  
下さいませ。」

「……いやよつ。私は待つわ。もう一度あの御方に会うまで。」

「……なりません。もうお時間です。さ、お早く！誰か、誰  
かいませんか。」

「……お願いよ、今ならまだ間に合うのっ！！」

「……さあ、参りましょう。」

「……いやあああ！！」

## プロローグ（後書き）

ここまで読んでくださいありがとうございます！  
評価などもしただけると嬉しいです。

まだ始まったばかりなのでお付き合いよろしくお願いします。

## 第1話 出会い

ガバツ

夢：よね？でも、この感じは…？

「遥<sup>ゆう</sup>、いつまで寝てるの？」

「今起きたあ。」

遥は制服に着替えると階段を駆け下りた。

「朝ご飯できてるわよ。お母さんは仕事に行っちゃうから後片付けはお願いな。」

「うん。いつてらっしゃい。」

私の母は、朝早くから遅くまで仕事をしている。なぜなら父がいないのだ。

旅に出たのだと母は言うけれど、実際は出て行ったのだと知っている。

ふと時計に目をやると8時を指していた。

「いけない！遅刻しちゃうっ！」

私は急いで家を出て猛ダツシュした。

教室にギリギリセーフで入ると親友の渚が話しかけてきた。

「おはよ、遥。今日、朝一で学年集会があるんだって。」

「え〜！1限目が始まる前に渚に数学の宿題移させてもらいたかったのにい。」

「遥ってばまた忘れたの？」

「ごめん。朝やるつもりだったんだけど寝坊しちゃって…。お願い

！」

「じゃあ、ジュース1本奢ってね。」

「もちろん！ありがと。」

「椎名あ、お前週番だぞ。手伝えっ。」

後方から日誌を片手に叫ぶ男子が一名。遥と週番らしい。

「うそっ！？じゃ渚、また後でね。」

渚と別れて男子に駆け寄る。

「日誌は取ってきたから。配布物の確認頼むな。」

わかった、と返事すると各クラス宛の配布物が入れられているトレイの確認に行く事にした。

小走りに廊下の角を曲がろうとしたとき、突然現われた人物とぶつかった。

ドンツツと派手にぶつかり遥は尻餅をつくはめになった。

「すみません…。」

「…いや。」

ぶつかった相手の男は、少しよれた帽子にＴシャツにジーパン。

私服…??

思わず上から下まで観察してしまった。

すると腕から血が。

「あ、あのこの怪我っ。」

見ると男の腕が擦り剥けて血が出ていた。

「ああ大丈夫。」

「でも…。じゃあ何もしないのもあれなんでこのハンカチ使って下さい。」

遥は自分のハンカチを男の腕に巻くと、男の首下で何かが反射して光った。

「眩しいっ。」

「あ、ごめん。鍵が。」

「鍵…?」

「そう。とても大切なものの鍵なんだ。」

「大切な?」

「うん。」

「何の?…あ、待って！明日教えて。もう集会の時間だから。いい?」

「いいよ。」

「あなた転校生?何組?」

「違う、君に会いたかったんだ。」  
え？

一瞬視線を逸らすと男は消えていた。  
誰だったんだろう。

この時、男は“変なヒト”という印象のみを残して消えた。

## 第2話 夢

結婚式を免れ、一時的な婚約式を披露した後の夜。

城の中は寝静まっていた。

ただ一部屋を除いては…

「……姫様、ご自分がなさったこと分かってらっしゃいますか？両国にとって今回の騒ぎは、あつてはならなかったことなのですよ。」

「……わかつているわ。それでも、結婚するわけには…。」

姫と呼ばれた少女が少し歳をとった侍女に小言を言われている最中、突然ドアが開かれた。

「……姫様！お急ぎの伝言があります！今、わが国より使者が参りまして…姫様の待っておられる殿方が、……お亡くなりになられたそうです。」

「……「っ…う…そ…でしょ。」

「……「それは本当なのですか？」

顔面蒼白になってしまった少女に代わり侍女が再度確かめる。

「……「はい。」

「……「だって…、だってまだ預かったままだわ！！あの御方が大切になさっていたもの、返してないもの。必ず返してもらいに來るって約束したものっ！！」

目からは涙が溢れ、必死で握る手を震わせながら少女は声を張り上げる。

信じたくないのだと全身で抗議していた。

「……姫様。これで決心なされましょう。婚姻の式が進められます。あの御方のことはお忘れ下さい！」

「……「露樹っ。お願いよ。私は誰とも結婚しません。誰とも式を挙げるつもりはありません。」

私はあの御方だけを…何年、何百年、何千年であろうと再び会えるまで待ち続けます。」

「……姫様！！我儂が過ぎますよ！この式は姫様の一存で変えられる事ではございません。一国としての問題なのです。」

「……どうしても願いが聞き入れてもらえないのなら、私は自害します。」

「……姫様！？…そこまでする必要があるのですか？あの御方とはそれほどまでに親しい関係だとは思えません。ただの約束なのでしたら…。」

「……いいえ。私は本当に心から好いていました。たとえあの御方が旅の剣士だとしても、たった一夜を共にした日、確かに私達の心は繋がったわ。あの御方は何よりも大切だというものを私に預けたの。…返さなくては。どんなに時が過ぎようと、この世でなくとも。」

侍女の目に見えた少女は今までに見た我儂な姫などではなく、しっかりと自分の意思を貫く覚悟の出来た一国の姫に相応しい少女へと成長していた。そのきっかけに剣士との恋があるとしても。

侍女は深い溜め息をつくと真剣な眼差しで少女と相対した。

「……国を捨てる覚悟はありますか。」

ここで、夢は終わった。

けれど遥の頬には涙の後が残っていた。

夢を見ながら泣いたの…？半ば信じられない気持ちだった。

しかも、昨夜見た夢の続きのようだったのが一番不思議に思った。そう簡単に続きが見られるわけがない。誰でもそう思うだろう。

しかし夢の事を深く考えても仕方がない、と切り替え遥は登校した。教室に入ると窓際の席に女子が群がっていた。

親友の渚に何あれ、と指さすと「転校生よ。」と呆れた様子で答えた。

「転校生！？それにしてもすごい人気なのね。」

「もお朝っぱら黄色い声が絶えないのよ。聞いてるだけで疲れたわ。」

「確かに。こんな時期に転校生なんて珍しい。あ！渚！宿題見せて

！！」

「またあ？今度は昼ご飯ねっ。」

「うん。」

どこまでも心の広い親友に感謝しつつ遥は必死で写し始めた。

転校生からの視線に気づくことなく…。

### 第3話 転校生

侍女からの突拍子のない真剣な言葉に、一同沈黙していた。そんな中、少女はきつく口を結び深呼吸をし侍女と向き合った。

「国を捨てます。」

この言葉で全ての後ろ盾・地位・権利を失うことになっても、国・両親を裏切ることになってもこの心だけは私のものだ。そう信じて私は国を捨てる。

「では、今すぐに支度をし夜が明ける前までにこの国を立ち去ってくださいませ。ここは私にお任せ下さい。さあ、姫様。」

「露樹：。ごめんなさい。いつも私をかばってくれて。」

「姫様に仕えられましたこと誇りに思います。どうかご無事に。」

「ありがとうございます。」

少女はすばやく身支度を済ませ、もう一人の従者である青年を連れて去ることにした。

これから何があるうとも後悔しないと覚悟を決めて・・・

3度目ともなれば慣れるものであり、この夢物語を楽しむことにした遥は目覚めが良かった。

例えただの夢物語でも、自分自身が主人公の少女に感情移入するせいで結構リアル感までも味わえるのだ。

昨日騒がれていた転校生は、遥と廊下で衝突した相手だった。

私服と制服とで多少印象が違ったが、話してみると彼だった。

さすがに怪我をさせた上に、君に会いたかったなどと齒の浮くようなことを言った人物を忘れたりはいなかった。

「あなた名前は？」

呼ぶにも名前を知らないことに気づいた遙は彼に尋ねた。

「夕緋・Ｔ・クラウディー。」

「ハーフなのね。夕緋って名前も綺麗。私は椎名遙。はるかっ書  
いてゆうって読むの。ねえ、昨日変なこと言ってたよね？私に会  
いたかったってのも変だけど、鍵なんて首から下げたりして。」

「これは大切なものの鍵だから。失くさないようにしてるんだ。」

「大切なものって？」

遙は好奇心で尋ねた。

「内緒。」

彼は小さく笑うとそれきり会話も途絶えた。

「大切なものねえ…。」

内緒、と言われるとよけい気になって仕方がない。

毎晩見るようになった夢物語でも大切なものって言ってたよね。

何なんだろう。

この疑問はこの日の夢で知ることになるとは、このときの遙はまだ  
知らなかった。

そして初めて知るだろう……

## 第4話 剣

- - - - 「姫様、自立たぬようこちらの服にお召し換え下さい。  
下女から借りて参りました。さあお早く！」

- - - - 「わかったわ。お礼も伝えてもらえる？」

- - - - 「必ず。」

- - - - 「姫様、そのままお聞き下さい。姫様はこの烙夜と共に  
我が国の最北端にあります村に行つて頂きます。そこから西へ向か  
われれば、先程の使者が剣士の話を聞いた街がございます。検問は  
全ての街や村で厳しくなるでしょう。出来るだけお早く向かつて下  
さいませ。」

- - - - 「わかったわ。烙夜、お願いね。」

- - - - 「はい！」

下町の少女に化けた姫とその使いは朝が明ける前に城を後にした。  
二人がまだ街の入り口に差し掛かった頃、城内では下女達が走り回  
りかん高い声をあげて姫を探していた。

- - - - 「露樹！誰か露樹を呼んで下さい！！」

女王は怒りで顔を真っ赤にして使用人にあたりちらしていた。その  
中の下女が慌てて露樹を連れてきた。

- - - - 「露樹、私が呼びつけた理由は分かっているわね？」

- - - - 「はい。」

- - - - 「どおゆう事なの、これはっ！？」

- - - - 「……………」

- - - - 「説明しなさい！」

- - - - 「できません。」

- - - - 「私が命令してるのよ。」

露樹は決して口を開かずにした。彼女はきつとこの城にはいられな  
くだろう、と誰もが感じていた。

一方、城を脱け出した二人組はやっと街を抜け深い森に入ろうとし

て  
い  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8815a/>

---

EVER LASTING

2010年10月22日11時11分発行